

## [研究論文]

## 社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係 —実証研究の概観—

黒田 祐二

人は他者や集団との関わりの中で生きる社会的な存在である。人が他者や集団と関わる中で起こす行動を社会的行動という。社会的行動には様々なものがあるが、例えば、困っている他者を助ける向社会的行動や、規則を遵守したり社会的な責任を果たしたりする道徳的行動などがある。これらの行動は集団や社会において行うべきであるとされている行動であり、規範行動とも呼ばれる。

人はこういった社会的・規範的な行動を幼少期からの社会化の過程で学んでいく。この過程で人に求められるのは、こういった行動を外的な圧力によって仕方なく（他律的に）行うのではなく、自らの意志で（自律的に）実行できるようになることである。例えば、誰かが見ているからルールを守る（見てないからルールを守らない）のではなく、誰かが見えていなくてもそれを自発的に守るようになることが求められる。

この資質を育む方法が心理学において提案されてきた。自己決定理論（self-determination theory；以下SDT）が提唱する自律性支援（autonomy support）はその1つである。SDTでは、社会で必要とされる行動を他律的に行うのではなく自律的に行うようになるためには、その行動の価値や重要性を内面化する必要があると考える。自律性支援はこの内面化を育み、促す方法である。

これまでに多くの研究が自律性支援の有効性について検証を行ってきた。とりわけ学習活動に対する自律性支援について実証研究が進んでおり、研究結果を総合的に分析するナラティブ・レビュー（Stroet, Opdenakker, & Minnaert, 2013; また Núñez & León, 2015, Reeve & Cheon, 2021, Ryan & Deci, 2017も参照のこと）やメタ分析（岡田, 2018; Vasquez, Patall, Fong, Corrigan, & Pine, 2016）が行われている。その結果、親や教師の自律性支援が子どもの学習活動の内面化を促進することが示されている。これらの研究は海外で行われたものであるが、我が国の研究からも同様の結果が示されている（速水, 1997; 伊藤, 2016; 鹿毛・上淵・大家, 1997; 三和・外山, 2021; 岡田, 2014; 佐柳, 2007）。

---

受付日 2022.4.27

受理日 2022.8.1

所 属 学術教養センター

他方、社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係についても検討され始めており、2000年代に入ってから実証研究の結果が報告されている。しかしながら、これらの実証研究をレビューした論文は筆者の知る限り見あたらない。関連する論文として、自律性の経験（自律性支援、自律性への欲求の充足、自律的動機づけ）と向社会的性（向社会的行動・認知・感情）との関係をメタ分析したDonald, Bradshaw, Conigrave, Parker, Byatt, Noetel, & Ryan (2021)の論文があるが、この論文では（向）社会的行動に対する自律性支援と（向）社会的行動の内面化（または自律的動機づけ）との関係について分析されていない。社会的行動に対する自律性支援は学校や家庭での教育や養育に有益な示唆を与える方法であり（黒田, 2022）、その有効性についてどの程度エビデンスが蓄積されているかを概観することには大きな意義がある。

そこで本論文では、社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係を実証的に検討した研究についてレビューを行う。レビューの方法としては、研究数が少なく知見の蓄積が十分ではないことを考慮し、ナラティブな方法を採用する。1つ1つの研究を質的に検討することで、現時点でのこの分野の現状と課題を明確にし、今後の展望を示す。

本論文の構成は次の通りである。第1節では、自律性支援及び内面化の定義や具体的内容について説明する。第2節では、本レビューの対象になる論文の検索方法及び選定基準について説明する。第3節では、選定された論文をレビューし、社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係についてどのような結果が得られているかを概観する。ここでは関連する研究についても簡潔にレビューする。第4節では、研究結果のまとめを行うと共に、この分野における課題と今後の方向性を示す。

## 1. SDTにおける自律性支援と内面化

SDT(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2017)は人間の動機づけを分類すると共に、その内的・外的源泉を特定した理論である。内面化と自律性支援はそれぞれ動機づけの内的な源と外的な源に該当するものである<sup>1</sup>。以下、SDTにおいて動機づけがどのように分類されているかを説明し、続いて内面化と自律性支援が動機づけとどのように関係しているかを説明する。

動機づけは伝統的に内発的動機づけと外発的動機づけに分類されてきた。内発的動機づけとは、ある活動を行う時に、その活動そのものに興味をもち、その活動をすることそれ自体を目的として、その活動に従事・没頭している状態を表す。例えば、勉強そのものを楽しみを見出して、成績のためでも将来就きたい職業のためでもなく勉強することそれ自体を目的として勉強に没頭している状態を挙げることができる。他方、外発的動機づけとは、ある活動を行う時に、その活動そのものに興味はなく、何か別の目的や理由があるためにその活動に従事している状態を指す。例えば、勉強はつまらないが、親や教師から叱られるので仕方なく勉強している状態を挙げることができる。この状態は外発的動機づけの典型的な例であり、外側からの圧

力によって行動がコントロールされている状態を表している。

私たちの社会生活の中でよく見られる動機づけは、内発的動機づけではなく外発的動機づけの方であろう。とりわけ、「ルールを守る」「勉強をする」などの社会的規範に基づく行動は、内発的に行うよりも外発的に行う場合が多いものと思われる。そもそも規範は自分自身が作り出したものではなく自分の外側から与えられるものだからである。

しかしながら、SDTでは、外発的動機づけによって行動する場合でも、外側からの圧力によって他律的に行動する（自分の行動が外的圧力によって制御される）場合だけではなく、自分の意志で自律的に行動する（自分の行動を自ら制御する）場合もあると考える。規則を守る行動を例に説明すると、「罰則があるからしぶしぶ規則を守る」場合だけでなく、「規則の重要性を理解して自発的に守る」場合があるだろう。このように、外発的動機づけには、より他律的なものより自律的なものがあると考えられる。SDTでは、外発的動機づけにおけるこうした自律性の違いに着目し、その違いによって外発的動機づけを4つのタイプに分類した。それらは、外的調整（external regulation）、取り入れ的調整（introjected regulation）、同一化的調整（identified regulation）、統合的調整（integrated regulation）と呼ばれる<sup>2</sup>。この順に自律性の程度が高くなっていくとされる。なお、先述した内発的動機づけは最も自律性の高い動機づけであり、内的調整（intrinsic regulation）と呼ばれる。

このように外発的動機づけは自律性の程度に応じて4つのタイプに分かれるが、SDTでは、これらのタイプ（自律性の程度）は内面化がどの程度進んでいるかによって決まると考える（図1）。内面化（または、内在化；internalization）とは、人が社会的な規範や行動に含まれている価値や重要性に気づき、それを自己の内部に取り込み、自分もっている他の価値や信念と一致・調和させる一連の心的プロセスを指す。この内面化が進めば進むほど外発的動機づけはより自律的なものになっていくと考えるのである（図1）。以下、内面化の進行状況と各調整タイプとの関連性について詳しく説明する。

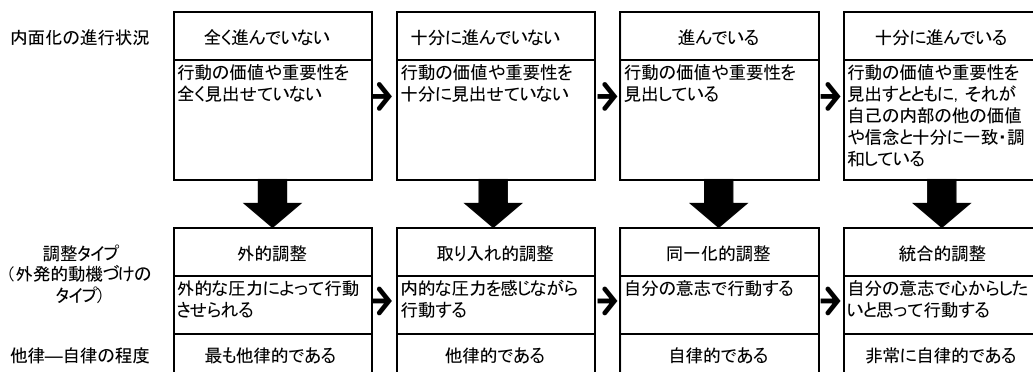


図1 内面化の進行状況に応じた調整のタイプ（黒田，2022）

外的調整は、内面化が全く進んでいない段階での外発的動機づけを表している。この段階にいる人は、社会から求められている行動に価値や重要性を見出すことができていないため、自らその行動を起こすことはない。その人がその行動を起こそうとするのは外部からの働きかけ（罰や報酬など）があった時だけである。例えば「教師に叱られるから校則を守る（叱られないから校則を守らない）」「親がゲームを買ってくれるから勉強する（買ってくれないから勉強しない）」などである。このように行動の生起が完全に外部の要因に依存している（行動が外的に制御されている）ため、外的調整は最も他律的な動機づけを表している。

取り入れの調整は、内面化が少し進んだが十分ではない段階での外発的動機づけを表す。この段階にいる人は、自分に求められている行動に価値を見出しているが、「そうすることが義務だから」「そうすることで人に認められるから」「そうすることで不安を解消できるから」といった価値づけにとどまっている。例えば、「良い生徒だと思われたいから校則を守る」「やらなければならないものだから勉強する」などである。この段階では、外側からの働きかけがなくても行動が起こる（自ら行動しようとする）ため、自律性の面で外的調整より一歩進んだ状態にある。しかしながら、義務感や自己価値の証明、不安感といった内的なプレッシャーを感じながら無理に行動する状態であり、自律的ではなく他律的な（コントロールされた）動機づけを表している。

同一化的調整は、内面化が進んだ段階での外発的動機づけを表す。この段階にいる人は、求められている行動の本来の価値や重要性を認識し、その認識に基づいて行動するようになる。例えば、「学校生活を安心・安全に過ごすために必要だから規則を守る」「自分の将来に役立つから勉強する」などである。同一化的調整は、自分の意志で主体的に行動しようとする自律的な外発的動機づけを表している。

最後の統合的調整は、内面化がかなり進んだ段階での外発的動機づけを表す。この段階にいる人は、求められている行動の本来の価値や重要性を認識すると共に、それらの価値や重要性を自己（自らの価値観や信念、欲求）の中で十分に調和・統合させることができています。このように内面化が高度に進んだ段階からは、「ルールを守ることの大切さが身にしみてわかっているから、そうするのはとても自然なことである」「勉強は自分の成長に欠かせないものであり、自分にとって自然な活動である」などのように、自己（自分の価値観、信念、欲求）と行動（自分の振るまい）とが十分に一致した、極めて自律的で自然な行動が生じる。

以上のように、行動の価値をどのくらい内面化しているかによって、その行動を自律的に行うかどうかが決まってくる。従って、支援者が被支援者に特定の行動を促したり求めたりする時には、被支援者がその行動の価値を内面化できるようにすることが1つのポイントになる。SDTではこの内面化を促す方法を3つの次元で整理している。それらは自律性支援、関与、構造と呼ばれる（Connell & Wellborn, 1991; Grolnick, Deci, & Ryan, 1997; Ryan & Deci, 2017;

Skinner & Belmont, 1993)。3つの支援方法の中で最も重要なのが自律性支援であり、多くの実証研究においてその効果が検討されている (Ryan & Deci, 2017, 2020)。本レビューでもこの自律性支援の効果を主に検討する。

自律性支援 (autonomy support) とは、支援者 (例：親や教師) が被支援者 (例：子ども) にある行動を促したり求めたりする時に、被支援者がその行動を自分の意志と選択で実行していると感じることができるように、また、行動の主体はまさに自分であると感じることができるように支援することを表す (Connell & Wellborn, 1991; Ryan & Deci, 2017; Skinner & Belmont, 1993; Su & Reeve, 2011)。自律性支援の具体例を挙げると、被支援者の視点を理解したり認めたりすること、行動を要求しなければならない時には納得のいく理由を丁寧に説明すること、意志決定や自己選択ができる機会を保障して被支援者に行動の主導性 (initiative) や所有性 (ownership) をもたせること、などがある (例えば、Deci, Eghrari, Patrick, & Leone, 1994; Ryan & Deci, 2013, 2017, 2020)。自律性支援と反対のかかわりは、コントロールである (Ryan & Deci, 2017, 2020; Skinner & Belmont, 1993)。コントロールとは、「～でなければならない」「～であるべきだ」など相手をコントロールする言葉や相手にプレッシャーを与える言葉を多用し、相手に特定の行動や思考をするように強いることである。なお、自律性支援は相手のしたいようにさせる「放任」ではない。自律性支援は社会的な規範や行動の内面化を促す方法であり、人が「社会的に重要であるが個人的にはしたくない活動」に能動的に取り組めるように支援する方法である (Deci et al., 1994; Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2017)。

自律性支援がなぜ内面化を促すのかという点について、SDTでは、それが被支援者の基本的心理欲求を満たすからであると説明する。すなわち、「自律性支援→基本的心理欲求の充足→内面化の促進」という作用機序を想定している。基本的心理欲求とは、人の成長と発達に欠かすことのできない生得的な欲求であり、自律性への欲求 (誰かに自分の行動をコントロールされるのではなく自分が自分の行動の主体でありたい、自分の意志で行動したいという欲求)、関係性への欲求 (他者や社会とつながりたいという欲求)、有能さへの欲求 (自分を取り巻く環境と効果的にやりとりできる存在でありたいという欲求) の3つで構成される。自律性支援によってこれら3つの欲求が満たされると、被支援者は自律性・関係性・有能さの感覚をもてるようになるため、社会的な規範や行動を内面化しやすくなるとされる。

自律性支援が被支援者の中の「生得的な」心理欲求を満たすものであるとするなら、それはどの被支援者にも普遍的に望ましい効果をもたらすとであろうと予測される。例えば、親が子どもに行う自律性支援は、どの文化・社会のどの子どもにとっても例外なく望ましい結果をもたらすと考えられる。こういった親の自律性支援の効果の普遍性に関して、Soenens, Vansteenkiste, & Van Petegem (2015)は、次のような考え方を提起している。彼らは、親の自

律性支援を「親の実際の行動」（理論的に「自律支援的である」と判断される行動）と「子どもによるその行動の知覚や評価（子どもの主観的な体験）」とに区別し、親の実際の行動はどの子どもにも望ましい結果をもたらすわけではないが、子どもが「自律支援的である」と知覚・評価した親の行動はどの子どもにも望ましい結果をもたらすと主張した。彼らによれば、理論的に「自律支援的である」と判断される行動を親がとっていたとしても、全ての子どもがその行動を「自律支援的である」と評価するわけではなく、子どものパーソナリティや文化によってその評価は異なってくるという。例えば、親が子どもにいくつかの選択肢の中から自分の行動を選ばせることをした場合、個人主義的な文化の子どもはそのかわりを自律支援的であると評価しやすいが、集団主義的な文化の子どもはそのように評価しにくいかもしれない。この場合、前者の子どもにはより望ましい効果が見込めるが、後者の子どもにはそれが見込めないことになる（自律性支援の効果に関するrelativisticな考え方）。しかしながら、ひとたび子どもが親の行動を「自律支援的である」と評価すれば、どの子どもにとっても普遍的に望ましい発達の結果がもたらされるという（自律性支援の効果に関するuniversalな考え方）<sup>3</sup>。この主張については第4節で再び取り上げる。

## 2. 文献の検索方法と選定基準

本論文の目的は、社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係についての実証研究を概観することであった。本節では、本論文で概観する研究の検索方法と選定基準について説明する。

### (1) 文献の検索

ここでは、検索に用いたキーワード、データベース、検索方法について説明する。

まず、検索のキーワードである。「自律性支援」に関するキーワードは、Slemp, Kern, Patrick, & Ryan (2018)を参考にして、次のものを用いた。国外論文の検索には、autonom\* support\*、support for autonomy、needs supportを用い<sup>4</sup>、国内論文の検索には、自律性支援、自律支援的、欲求支援を用いた。次に、「社会的行動」に関するキーワードは、国外論文の検索にはprosocial\*、moral\*、friend\*を用い<sup>5</sup>、国内論文の検索には向社会、道徳、友人を用いた。向社会（prosociality、prosocial、prosocialable）及び道徳（morality、moral）という用語を用いたのは、Ryan & Connell (1989)により開発された内面化の測定尺度（Prosocial Self-Regulation Questionnaire; P-SRQ）が向社会的（prosocial）行動と道徳的（moral）行動の内面化を測定する尺度であり、多くの研究がこの尺度を用いているためである。これらの行動は、家庭や学校において育成する必要がある社会的に重要な行動である。また、友人（friend）という用語を用いたのは、友達付き合いの内面化（例：Soenens, Vansteenkiste, & Niemiec, 2009）や友人関係の動機づけ（例：岡田, 2008）に関する研究が国内外で行われているため

ある。なお、内面化、内在化、internalizationというキーワードも用いて検索したが、ヒットする論文が少なくなったため、上述したキーワードのみを使って広く論文を検索するようにした。

次に、用いたデータベースと検索方法について説明する。国外論文については、American Psychological AssociationのPsycINFOを用いて、以下の検索式と検索条件で検索を行った。検索式は、(“autonom\* support\*” OR “support for autonomy” OR “needs support”) AND (prosocia\* OR moral\* OR friend\*) であり、これらのワードがAny Fieldにある論文を検索した。検索条件としては、1989年から2022年までのPeer Reviewed論文を指定した。検索開始年を1989年に設定したのは、それがP-SRQの開発された年だからである。国内論文に関しては、Google ScholarとCiNii Articlesを用いて、(“自律性支援” OR “自律支援的” OR “欲求支援”) AND (向社会 OR 道徳 OR 友人)という検索式で、1989年から2022年までに公開された論文を検索した。

検索は2022年1月31日に行った。検索の結果、国外論文は140件ヒットした。国内論文はGoogle Scholarでは154件、CiNii Articlesでは30件ヒットした。

なお、以上の方法ではヒットしない論文もあると考えられたため、①ヒットした論文やDonald et al. (2021)の引用文献を見て探す、②学術誌や学会誌の論文タイトルを見て探す、などの補助的な方法も用いて広く論文を収集した。

## (2) 文献の選定基準

収集した論文の中から本レビューの対象にする論文を3つの基準によって決定した。それらは、①社会的行動に対する自律性支援と社会的行動の内面化（調整スタイルや動機づけ）との関係を検討していること、②国内論文に関しては学会誌や学術誌（大学紀要等を含む）に掲載された論文であること、③研究対象が児童と青年であり、臨床サンプルでないことであった。

これらの基準に照らし合わせて論文を検討した結果、表1に示した15の論文が本レビューの対象となった。国内論文で本レビューの対象になるものはなかったが、「社会的行動に対する自律性支援」と「社会的行動の内面化（調整スタイルや動機づけ）」のどちらかに関連する研究がいくつか行われていた。これらの研究は第3節（4）で紹介する。

## 3. 実証研究の概観

実証研究のレビューを行う前に、各研究で用いられた内面化と自律性支援の尺度について簡単に説明する。

内面化の尺度は、先述したP-SRQやこれに基づいて作成された尺度が利用されている。P-SRQは、社会的行動（向社会的行動や道徳的行動）の理由を測定する尺度である。例えば、「友達との約束を守る」理由として、「約束を守らないと友達が怒るから」「友達に好かれたいから」

「約束を守ることは大切だと思うから」といった項目を回答者に提示し、それぞれ自分にどのくらいあてはまるかを4件法で評定させる<sup>6</sup>。それぞれの理由は第1節で説明した調整タイプ(内面化の進行状況)に対応している。上記の例で言うと、それぞれ「外的調整」「取り入的

表1 本論文でレビューする実証研究

	独立変数 (支援方法)	従属変数 (内面化)	研究対象	研究計画
Roth (2008)	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 条件つき承認	向社会的行動の内面化	大学生(国籍不明)	横断
Roth, Kanat-Maymon, & Bibi (2011)	教師の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	向社会的行動の内面化	イスラエルの中学生(7年生と8年生)平均年齢13.4歳	横断
Roth & Weinstock (2013)	教師の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	向社会的行動の内面化	イスラエルの中学生(7年生と8年生)平均年齢13.3歳	横断
Jungert, Piroddi, & Thornberg (2016)	教師の自律性支援 子どもの選択や興味の尊重	向社会的行動の内面化	イタリアの5年生から9年生(11~15歳)までの児童生徒	横断
Hardy, Padilla-Walker, & Carlo (2008)	親の自律性支援 親の構造提供 親の関与	道徳的行動の内面化	アメリカの高校生	横断
Bureau & Mageau (2014)	親の自律性支援 ①理由の説明 ②選択肢の提供 ③気持ち理解 親のコントロール	正直さ(嘘をつかないこと)の内面化	カナダの青年(平均年齢13.0歳)	横断
Vansteenkiste, Soenens, Van Petegem, & Duriez (2014), Sample 2	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 親のコントロール	道徳的行動の内面化	高校生の(国籍不明)	縦断
Van Petegem, Vansteenkiste, Soenens, Zimmermann, Antonietti, Baudat, & Audenaert (2017)	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 親のコントロール	道徳的行動の内面化	ベルギーの中学生・高校生	横断
Barni, Russo, Zagrean, Di Fabio, & Danioni (2020)	親の自律性支援 意志機能の促進	道徳的行動の内面化	イタリアの14歳から19歳の青年	横断
Soenens & Vansteenkiste (2005)	親の自律性支援 教師の自律性支援	友人関係の内面化	ベルギーの10~12年生(15~21歳の青年)平均年齢17歳	横断
Kanfo & Assor (2007), 研究1・2	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 ③選択肢の提供	親が伝える人生上の価値に同意する理由	イスラエルの高校生(研究2)・大学生(研究1)	横断
Soenens, Vansteenkiste, & Niemiec (2009)	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 親のコントロール	友達付き合いのルールの内面化	ベルギーの14歳から19歳の青年	横断
Vansteenkiste, Soenens, Van Petegem, & Duriez (2014), Sample 1	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 親のコントロール	友達付き合いのルールの内面化	高校生(国籍不明)	縦断
Van Petegem, Vansteenkiste, Soenens, Zimmermann, Antonietti, Baudat, & Audenaert (2017)	親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 親のコントロール	友達付き合いのルールの内面化	ベルギーの中学生・高校生	横断
Wuyts, Soenens, Vansteenkiste, & Van Petegem (2018)	親の自律性支援 選択肢の提供, 共感的理解, 反映技法他 親のコントロール	友人関係についての自己開示の理由	ベルギーの青年 平均年齢14歳(12~16歳)	横断

注) Van Petegem et al. (2017)とWuyts et al. (2018)以外の研究では、子どもに親の支援方法を評定させている。



調整」「同一化的調整」に対応している。

自律性支援の尺度は研究により異なっている。ただし、多くの研究が「理由の説明」と「子ども視点」を測定し、それらを自律性支援の指標としている（表1）。具体的な項目内容はそれぞれの研究を紹介する中で説明する。なお、Van Petegem, Vansteenkiste, Soenens, Zimmermann, Antonietti, Baudat, & Audenaert (2017)とWuyts, Soenens, Vansteenkiste, & Van Petegem (2018)を除く全ての研究で、自律性支援の測定には親の評定ではなく子どもの評定を用いている。すなわち、ほとんどの研究が自律性支援についての子どもの知覚（主観的体験）を測定していることになる。

それでは先行研究を概観していきたい。以下では、(1)向社会的行動（他者に対する思いやりなど）、(2)道徳的行動（ルールの遵守など）、(3)その他の社会的行動・態度・価値、(4)関連研究に分けて、先行研究を概観していく。なお、(1)から(3)の研究の結果等のまとめは、4節の表2に示されている。また、以下の説明では、本文を読みやすくするために因果関係を示唆する表現（例：正の効果を与える、〇〇を促進する、変数A→変数B）を用いるが、ほとんどの先行研究は横断研究（相関研究）であり、本来であればこれらの研究から因果関係について言及することはできない。この点に注意されたい。

### （1）向社会的行動に関する研究

向社会的行動に対する自律性支援とその内面化については4つの研究が検討を行っている。

Roth (2008)の研究では、「両親の自律性支援と条件つき承認→子どもの向社会的行動の内面化→援助行動傾向」というプロセスを検討した。対象は大学生であった。自律性支援については「理由の説明」と「子ども視点」を検討した。どちらも向社会的行動に対する自律性支援を表している。「理由の説明」の質問項目は「子どもの頃に自分の親は他者を助けることがなぜ重要なのかを説明してくれた」などであり、子ども視点の項目は「自分が困っている友達を助けなかった時、親はその理由を理解しようとしてくれた」などであった。条件つき承認（conditional regard）とは、子どもが望ましい行動をした時だけ承認や愛情を与える養育態度を指す。母親と父親それぞれの自律性支援と条件つき承認について大学生に評定させた。向社会的行動の内面化の指標としては、取り入的調整と同一化的・統合的調整の2つを用いた。本研究における取り入的調整は、向社会的行動を行う時に内的な圧力を感じる傾向を表している（項目例：他者の欲求や感情に過度に配慮しなければならないと感じることがある）。また、同一化的・統合的調整は、向社会的行動を行う時にそれを自ら選択して行っていると感じる程度を表している（項目例：他者を助けたり思いやったりすることは、義務や命令ではなく自分自身が選択してすることである）。援助行動傾向に関しては、自己志向的援助行動と他者志向的援助行動の2つを検討した。前者は困っている他者を自己満足（賞賛や承認）のために助ける傾向であり、後者は純粹に相手のことを思って助ける傾向を表す。母親と父親

に分けて構造方程式モデリングにより仮説を検討した結果、「母親及び父親からの自律性支援に関する子どもの知覚→向社会的行動の同一化的・統合的調整→他者志向的援助行動」というプロセスと、「母親及び父親からの条件つき承認に関する子どもの知覚→取り入れ調整→自己志向的援助行動」というプロセスが示された。これらのプロセスは、親の温かさ (parental warmth) の知覚と社会的望ましさを統制してもなお示された。前者は先行研究において子どもの発達に影響することが示されている変数であり、後者は自律性支援や内面化の評定に影響する可能性のある変数である。本研究の結果は、母親や父親が子どもの立場に立ちながら向社会的行動がなぜ大切なのかを伝えていると (そのように子どもが知覚していると)、子どもは向社会的行動の価値や重要性を内面化しやすくなり、困っている他者を純粹に助けようとしやすくなることを示唆している。また、母親や父親が条件つき承認を行っている (そのように子どもが知覚していると)、子どもは向社会的行動の本来の価値や重要性を内面化することができず、承認や賞賛を得るために向社会的行動を行いやすくなることを示唆している。

Roth, Kanat-Maymon, & Bibi (2011)は、「担任教師からの自律性支援→生徒の向社会的行動の内面化→いじめ行為の低減」というプロセスを検討した。教師の自律性支援としては、「理由の説明」と「子ども視点」を検討した。どちらも向社会的行動に対する自律性支援を表している。理由の説明の質問項目は「担任教師はお互いに思いやることがなぜ大切なのかを説明してくれる」などであり、子ども視点の項目は「生徒同士でけんかが起こった時、担任教師は必ず双方の話を聞く」などであった。生徒の向社会的行動の内面化としては、外的調整と同一化的調整を検討した。これらは「クラスメートを思いやり援助したりする理由」を尋ねることで測定された。外的調整は「先生に褒められたいから」「先生に叱られたくないから」などの理由であり、同一化的調整は「自分にとって大切なことだから」「そうすることは自分に充実感をもたらすから」などの理由であった。性別を統制してマルチレベル分析により仮説を検討した結果、「教師からの自律性支援に関する子どもの知覚→向社会的行動の同一化的調整→いじめ行為の低減」というプロセスが個人レベルでもクラスレベルでも示された。この結果は、教師が生徒の視点で生徒のことを理解しようとした上で、生徒に思いやることや助け合うことがなぜ大切なのかを説明していると (生徒がそのように知覚していると)、生徒の中でこれらの行動の価値や重要性が内面化され、その結果、いじめ行為が起りにくくなることを示唆している。

Roth & Weinstock (2013)は、「教師の認識論的信念→教師の自律性支援→生徒の向社会的行動の同一化的調整」というプロセスを検討した。認識論的信念 (epistemological beliefs) とは、人がもっている「知識の性質」についての信念であり、「知識は客観的・絶対的なものであり、外側の権威や世界から与えられるものである」という客観主義的信念と、「知識は相対的なものであり、個々人によって主観的に構築されるものである」という相対主義的信念がある。本

研究では、教師が歴史分野の客観主義的信念をどの程度もっているかを、教師自身に評定させた。自律性支援と同一化的調整の測定にはRoth et al. (2011)と同じ尺度を用いた。マルチレベル分析（階層線形モデル）による検討の結果、客観主義的信念が自律性支援に負の効果を与え、自律性支援が同一化的調整に正の効果を与えることが示された。自律性支援と同一化的調整との関係がRoth et al. (2011)とは別のサンプルにおいても確認された。

Jungert, Piroddi, & Thornberg (2016)は、「担任教師の自律性支援・温かさ・対立→いじめ被害者に対する援助行動の内面化→いじめ被害者に対する援助行動・傍観・観衆的行動」というプロセスを検討した。より具体的には、①「自律性支援→援助行動の同一化的調整と内的調整→援助行動」、②「温かさ→援助行動の同一化的調整と内的調整→援助行動」、③「対立→援助行動の外的調整→傍観・観衆的行動」というプロセスを検討した。この研究における自律性支援は、子どもが興味をもったことを追求できるように支援することを表す。温かさ (warmth) は、教師が子どもを大切にしていることを表す。対立 (conflict) は、教師の厳しい態度 (harshness) や批判的な言動を表す。それぞれの質問項目の例は、「先生は私のしたい活動をさせてくれる」「先生は私のことが好きである」「先生はすぐに私のことを叱る」である。なお、この研究では、温かさをSDTにおける「関与」の高い状態と見なし、対立をそれが低い状態と見なししている。援助行動の内面化を測定するために、「他の生徒がいじめられているのを目撃した」という状況を想定させ、なぜその生徒を助けるのかを尋ねた。具体的な項目は、「助けたいと思うから」（内的調整）、「助けることが大切だと思うから」（同一化的調整）、「人気者になりたいから」（外的調整）などであった。構造方程式モデリングを用いて男女に分けて仮説を検討した結果、①の仮説は男女共に支持されなかった。②と③の仮説は女子において支持された。①の仮説が支持されなかった理由について、Jungert et al. (2016)は、自律性支援の測定尺度が適切ではなかったことを挙げている。すなわち、彼らが用いた尺度は向社会的行動に対する自律性支援を測定するものではなく、学習活動やクラス活動に対する自律性支援を測定するものであった。援助行動の内面化に影響するのは学習活動やクラス活動に対する自律性支援ではなく、向社会的行動に対する自律性支援であるため（自律性支援の領域特異性）、適切な尺度を開発した上で再度仮説を検証する必要があると彼らは論じている。

4つの研究の内3つにおいてSDTの予測が支持された。方法論については、どの研究も横断的計画で実施されたものであり、扱っているデータは一時点のものであった。また、自律性支援の測定には親や教師の評定ではなく子どもの評定が用いられていた。

## （2）道徳的行動に関する研究

近年になって道徳動機づけを自己決定理論から捉えようとする試みがなされている (Arvanitis, 2017; Assor, 2012; Krapp, 2013)。また、2020年に道徳教育の学術誌 (Journal of Moral Education) において自己決定理論に関する特集が組まれた (Krettenauer & Curren,

2020)。このように自己決定理論と道徳性との関係が明らかにされつつあるが、本論文では、道徳行動に対する自律性支援とその内面化との関係に焦点を絞り、先行研究を概観する。

Hardy, Padilla-Walker, & Carlo (2008)の研究では、親の養育態度（子ども評定）と子どもの道徳性の内面化との関係を検討した。彼らは、養育スタイル尺度（Parenting Styles Inventory）を用いて、親の自律許容（autonomy-granting）、応答性（responsiveness）、要求性（demandingness）を測定したが、それぞれをSDTにおける自律性支援、関与、構造に対応させている。それぞれの具体的な質問項目は、「親は私の物事の見方を認めてくれている」、「親は私との会話やおしゃべりに時間を割いてくれる」、「親は私が家族のルールに従うことを強く願っている」などである。父親と母親のどちらかについて子どもに評定させた。道徳性の内面化については、外的調整、取り入的調整、同一化的調整、統合的調整の4つを検討した。これらは「道徳的な行為をする理由」や「非道徳的な行為をしない理由」を尋ねることで測定された。例えば、「テストでカンニングをしない理由」について、外的調整は「もし見つかったらそのテストで不合格になるから」、取り入的調整は「カンニングをする悪い生徒だと先生に思われたくないから」、同一化的調整は「カンニングするのは不誠実なことだから」、統合的調整は「自分は不誠実な人間ではないから」という理由である。階層的重回帰分析の結果、応答性が統合的調整及び同一化的調整に正の効果を与え、要求性が外的調整及び取り入的調整に正の効果を与えることが示された。また、応答性と自律許容の交互作用が統合的調整に正の効果を与えることが示された<sup>7</sup>。交互作用のパターンを検討したところ、応答性が高い場合には自律許容が統合的調整に正の効果を与えるが、応答性が低い場合にはこの効果が見られないことが示された。これらの結果は、道徳性の内面化において応答性が重要な役割を果たしており、自律許容の効果は応答性が高い場合にのみ見られることを示唆している。ただし、自律性支援、関与、構造と、自律許容、応答性、要求との概念的な対応性について注意が必要である。特に、Hardy et al. (2008)は養育スタイル尺度の「要求性」をSDTの「構造」に対応させているが、両者の定義は異なるものであり、要求性は構造よりむしろ（自律性支援と反対のかかわりである）「コントロール」を反映しているものと考えられる。Hardy et al. (2008)は、この要求性について「子どもをコントロールする形で構造を与えること」を表しているのではないかと考察している。要求性はコントロールそのものもしくは構造のコントロール的な側面を表しているために、外的調整及び取り入的調整に正の効果を与えたのではないかと推測される。

Barni, Russo, Zagrean, Di Fabio, & Danioni (2020)は、親の自律性支援の1つとして子どもの意志機能（volitional functioning）を促進するかかわりを取り上げ、道徳性の内面化との関係を検討した。意志機能を促進するかかわりとは、例えば、子どもが自分の人生の方向を自分自身で選べるように支援することである。母親と父親それぞれのかかわりについて子どもに評定させた。内面化の測定にはHardy et al.(2008)と同じ尺度を用いた。独立変数として母親と父

親のかかわりを同時に投入し、4つの調整タイプそれぞれを従属変数とする回帰分析<sup>8</sup>を行った結果、母親のかかわりが統合的調整及び同一化的調整に正の効果を与えることが示された。他方、父親のかかわりはどの調整タイプにも効果を与えなかった。父親のかかわりは統合的調整及び同一化的調整と正の有意な相関を示していたことから、父親のかかわりの効果は母親のそれに帰されたものと考えられる。これらの結果は、青年期の道徳性の内面化において父親よりも母親の影響の方が大きいことを示唆している。ただし、Barni et al. (2020)は、この研究の対象はイタリアの青年であったため、結果を解釈する時には母子の結びつきが強いイタリア文化の影響を考慮する必要があると論じている。

Vansteenkiste, Soenens, Van Petegem, & Duriez (2014)は、親が子どもの友達付き合い（サンプル1）や道徳的行為（サンプル2）に関することで約束事やルールを設定する時、自律支援的なやり方で設定する場合と子どもをコントロールするやり方で設定する場合とがあると考えた。そして、この2つのやり方が、友達付き合いや道徳的行為のルールの内面化にどう影響するかを検討した。ここでは、サンプル2の研究について説明する。この研究での自律支援的なやり方とは、母親が子どもに道徳上のルールを伝える時に（具体的には、嘘をつくなどの非道徳的な行為をしてはいけないということを伝える時に）、なぜそれが重要なか理由を説得的に説明することや、子どもの意見に耳を傾けようとすることを表している。他方、コントロールするやり方とは、言うことをきかなければ罰を与えたり（外的コントロール）、失望すると伝えたり（内的コントロール）することを表している。母親がこれらのやり方をどの程度行っているかを、子どもに評定させた。内面化については、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整の3つを検討した。これらは、母親から伝えられた道徳的なルールを守る理由を尋ねることで測定された。それぞれの具体例を挙げると「ルールを守らないと罰を与えられるから」「ルールを守らないのは恥ずべきことだから」「そのルールが自分にとって大切なことだから」などがある。これらの他に、母親が子どもの非道徳的行為を禁止する程度（子ども評定）と、母親に対する子どもの反抗の程度も測定された。この研究では、2回の縦断調査によってデータが収集され、上記の全ての変数が1時点目と2時点目の両方で測定された（図2参照）。図2の分析モデルを、パス解析を用いて調整タイプ毎に検討した。結果から、1時点目の同一化的調整を統制した上で、1時点目の自律性支援が2時点目の同一化的調整を予測することが示された。この結果は、1時点目の自律性支援が1時点目から2時点目にかけての同一化的調整の得点の変化を予測することを示しており、「自律性支援が同一化的調整を高める」という因果関係を考える上で重要な知見である。また、1時点目の反抗を統制した上で、1時点目の自律性支援が2時点目の反抗に負の効果を与えることと、1時点目のコントロールが2時点目の反抗に正の効果を与えることも示された。この結果は、自律性支援は子どもの反発を低減し、コントロールはそれを高めることを示唆している。以上の結果はSDTの予測を支持している。

その一方で、1時点目の自律性支援が2時点目の取り入れ的調整に正の効果を与えることも示された。この結果はSDTの予測に反するものである。なお、この研究からは、親が子どもの非道徳的行為を禁止する程度は、子どもの内面化や反抗に影響を与えないことが示された。この結果は、道徳ルールの内面化を促すためには、やってはいけない行為をどのくらい禁止するかよりも、どうやって禁止するか（つまり、自律支援的なやり方で禁止するか、コントロールするやり方で禁止するか）の方が重要であることを示唆している。また、この研究では、親と子どもの間の双方向の影響を仮定し、「自律性支援・コントロール（親）→内面化・反抗（子ども）」という関係のみならず、「内面化・反抗（子ども）→自律性支援・コントロール（親）」という関係も仮定し、分析を行っている（図2参照）。後者の結果については、4節で概観する。

Vansteenkiste et al. (2014)の研究では、母親の自律性支援とコントロールを子どもに評定させていたが、Van Petegem, Vansteenkiste, Soenens, Zimmermann, Antonietti, Baudat, & Audenaert (2017)の研究では、それらを母親自身にも評定させ、子どもの道徳ルールの内面化や友達付き合いの内面化との関係を検討した<sup>9</sup>。ここでは道徳ルールの内面化に関する結果を報告する。本研究で用いた尺度はVansteenkiste et al. (2014)のものと同一であった。なお、この研究ではVansteenkiste et al. (2014)のように内面化を3つのタイプに分けるのではなく、内面化の深まりを表す指標（Relative Internalization Index; RII）を用いた<sup>10</sup>。子ども評定を用いた分析の結果、自律性支援がRIIに正の効果を与え、コントロールがそれに負の効果を与えることが示された。母親評定を用いた分析からは、自律性支援はRIIに正の効果を与えないが、コントロールがそれに負の効果を与えることが示された。母親評定の自律性支援はRIIと有意な正の相関を示していたことから、自律性支援のRIIに与える効果がコントロールを含む他の要因の効果に還元されたと考えられる。後述するように、友達付き合いに関しても同様の結果

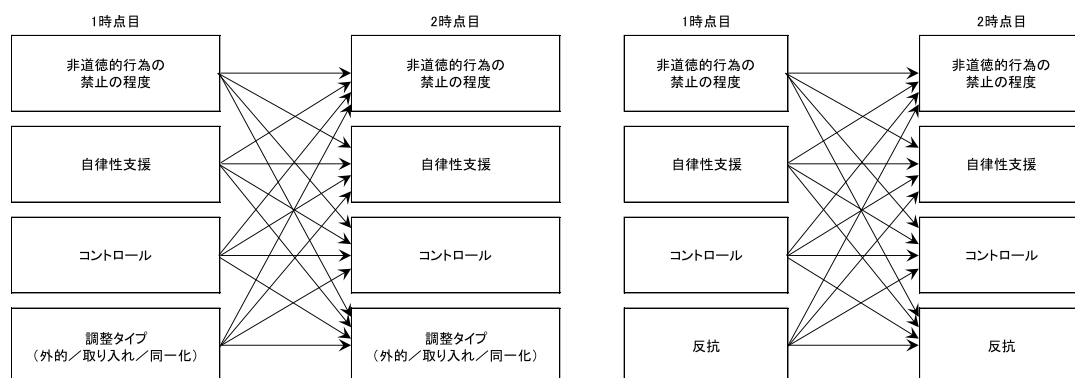


図2 Vansteenkiste et al. (2014) における分析モデル

注) 調整タイプの分析では、タイプ毎にモデルが作成されたため、3つのモデルが検討されている。全ての分析において、性別・年齢・教育的バックグラウンドが統制されている。

が見出されている<sup>11</sup>。また、Vansteenkiste et al. (2014)と同様に、親が子どもの非道徳的行為を禁止する程度（親評定及び子ども評定）は子どもの内面化に影響を与えないことが示された。この研究からも非道徳的行為を禁止する程度ではなくそのやり方が重要であることが示された。

Bureau & Mageau (2014)は、母親ないし父親からの自律性支援及びコントロールと正直であること（嘘をつかないこと）の価値の認識との関係を検討した<sup>12</sup>。自律性支援とコントロールは、Perceived Parental Autonomy Support Scaleを用いて測定した（子ども評定）。自律性支援は、理由を説明すること（項目例：「私が親にどうして〇〇をしなければならないか、あるいは、〇〇をしてはいけないかと尋ねた時に、親はその理由をきちんと説明してくれた」）、選択肢を与えること（例：「私がすることについて自分で決められるように親は選択肢を与えてくれた」）、気持ちを認めること（例：「私の意見が親のそれと違う時でも、親は私の意見に耳を傾けてくれた」）の3つの側面で構成されている。コントロールは、罰による脅し（例：「親が言ったことには従わなければならないし、もし従わなければ罰を与えられた」）、パフォーマンス・プレッシャー（例：「親が私のことを誇りに思えるように、私は一番でなければならなかった」）、罪悪感の喚起（例：「何をする時でも親は私に罪悪感をもたせた」）の3つで構成されている。正直であることの価値の認識については、内面化と性格特性（誠実で公平な性格）の2つを測定し、これら2つの潜在変数を指標として用いた。内面化の尺度では、普段の生活において正直であることの原因を尋ね、同一化的調整（例：「自分自身のためにそうであることを選んだから」）、取り入れ的調整（例：「正直でないと良くないと感じるから」）、外的調整（例：「怒られるから」）の3つを測定した。分析には、内面化の深さを単一的に表したRelative Autonomy Index (RAI)を用いた。年齢を統制して構造方程式モデリングにより分析を行った結果、自律性支援が正直さの価値の認識に正の効果を与え、コントロールがそれに負の効果を与えることが示された。また、多母集団同時分析を行ったところ、上記の結果に性差は示されなかった。

5つの研究の結果をまとめると、Hardy et al. (2008)を除く4つの研究においてSDTの予測を支持する結果が示された。養育スタイル尺度を用いたHardy et al. (2008)の研究からは、応答性が高い時に自律許容が道徳性の内面化を促すことが示された。また、Vansteenkiste et al. (2014)の研究から、自律性支援が取り入れ的調整を促進するという結果も示された。方法論についてまとめると、4つの研究において自律性支援の子ども評定を用いており、1つの研究で子ども評定と親評定を用いていた。また、4つの研究で横断データを分析し、1つの研究で縦断データを分析していた。

### (3) その他の社会的行動・態度・価値に関する研究

ここでは、向社会的行動と道徳的行動以外の社会的行動・態度・価値を検討したものとして、6つの研究を概観する。

Soenens & Vansteenkiste (2005)は、「母親・父親・教師の自律性支援→友人関係の内面化→社会的コンピテンス」というプロセスを検討した。親の自律性支援の測定にはPerceptions of Parents Scale (POPS) を用い、教師の自律性支援の測定にはLearning Climate Questionnaire (LCQ) を用いた。POPSは、母親と父親からの全般的な自律性支援を子どもに評定させるものである（質問項目例：「何をするかを自分で決められるようにしてくれる」）。LCQは、授業の雰囲気や教師の学習の進め方について子どもに評定させるものである（項目例：「どうやって進めたいか聞いてくれる」「選択肢を与えてくれる」）。友人関係の内面化の測定には、Friendship Self-Regulation Questionnaire (F-SRQ) を用いた。F-SRQ は、「友達と一緒にいたり親しくしたりする理由」を尋ねるもので、外的調整（例：「そうしないとその子が怒るから」）、取り入れ的調整（例：「そうするものだと思うから」）、同一化的調整（例：「その子と一緒に過ごす時間を大切にしているから」）、内的調整（例：「その子と一緒にいると楽しいから」）を測定するものである。分析ではRAIを用いた。構造方程式モデリングの結果、「母親の自律性支援→RAI→社会的コンピテンス」というプロセスのみ示された。教師の自律性支援がRAIに効果を与えなかったことについて、自律性支援の尺度が本研究には適していなかった可能性が考えられる。LCQは自律支援的な「授業」の雰囲気や「学習」の進め方を測定するものであり、子どもの「社会的行動」に対する自律性支援を測定するものではない。LCQによって測定される自律性支援が子どもの「友人関係」の内面化に与える影響は弱いであろうと推察される。

Knafo & Assor (2007)は、親が子どもに人生上の価値<sup>13</sup>を伝える時に自律支援的な方法をとることで、子どもが親の伝える価値に自発的に同意しやすくなると仮定した。自律支援的な方法としては、①理由の説明（例：なぜその価値が大切なのかを説明すること）、②視点取得（例：子どもの視点に立ち、子どもが望んでいることを考慮しようとする）、③選択肢の提供（例：自分のやり方で価値を表現すればよいと伝えること）を検討した。両親がどの程度これらの方法をとっているかを子どもに評定させた。同意の仕方については「親から伝えられる価値に同意する理由」を尋ね、外的調整（例：親に叱られたくないから）、取り入れ的調整（例：親をがっかりさせたくないから）、同一化的調整（例：親の価値は正しいと思えるから）、統合的調整（例：親の価値が自分自身と一致しているから）の4つを測定した。分析では、外的調整と取り入れ的調整を統合した「統制的動機づけ」と、同一化的調整と統合的調整を統合した「自律的動機づけ」を用いた。大学生（研究1）と高校生（研究2）を対象に、性別等を統制して仮説を検討した結果、どちらのサンプルにおいても自律性支援と自律的動機づけとの間に正の関係が示された。また、大学生のサンプルにおいて自律性支援と統制的動機づけとの間に負の関係が示された。

Soenens, Vansteenkiste, & Niemiec (2009)は、親が子どもに友達付き合いのルールを課す（例えば、非行少年など特定の友達との付き合いを禁止する）やり方として、自律支援的な方法と



コントロールする方法があると考え、前者の場合には子どもがルールを内面化しやすく、後者の場合にはそれを内面化しにくくなると仮定した。そして、ルールの内面化が、非行少年との関わりや問題行動に影響するという一連のプロセスを仮定した（自律性支援・コントロール→友達付き合いのルールの内面化→非行少年との関わり→問題行動）。自律支援的な方法は、特定の友達との付き合いを禁止する時に、なぜそれが大切なのか、どうして付き合いをやめてほしいのか理由を説明したり、子どもの意見に耳を傾けようとしたり、子どもの状況に理解を示そうとしたりすることである。他方、コントロールするやり方は、もしその友達との付き合いを続ければ罰を与えると言ったり（外的コントロール）、失望すると伝えたり（内的コントロール）することである。両親がどの程度これらの方法をとっているかを子どもに評定させた。内面化については、「親が設定する友達付き合いのルールを守る理由」を尋ね、外的調整（例：ルールを守らないと罰を与えられるから）、取り入的調整（例：守らないといけないことだから）、同一化的調整（例：そのルールが自分にとって意味のあるものだから）の3つを測定した。分析にはRAIを用いた。仮説を構造方程式モデリングにより検討した結果、自律性支援は内面化を促進し、コントロールは内面化を抑制することが示された。そして、内面化は非行少年とのかわりを抑制することで問題行動を防ぐことが示された。この結果から、親が子どもの自律性を尊重しながら友達付き合いのルールを伝えると、子どもはそのルールを内面化しやすくなり、その結果として非行少年との付き合いが減って問題行動を起こしにくくなることが示唆される。逆に、子どもの友達付き合いを親がコントロールしようとする、子どもはルールを内面化することができず、その結果非行少年とのかわりが増えて問題行動を起こしやすくなることを示唆される。なお、本研究では、親が友達付き合いを禁止する程度（子ども評定）を統制していたため、自律性支援とコントロールはこの禁止の程度に関わらず子どもの内面化、非行少年との付き合い、問題行動に影響を及ぼすと考えられる。

(2)で説明したVansteenkiste et al. (2014)のサンプル1を対象とした検討では、Soenens et al. (2009)と同様に、親が友達付き合いのルールを課すやり方と子どものルールの内面化との関係を検討した。ただし、この研究では縦断データを収集して分析を行った（図2を参照）。自律性支援とコントロールの尺度はSoenens et al. (2009)と同じものを用いたが、この研究では両親ではなく母親の行動について子どもに評定させた。内面化の尺度はSoenens et al. (2009)と同じであった。図2に示したモデルをパス解析により検討した結果、1時点目の同一化的調整を統制した上で、1時点目の自律性支援が2時点目の同一化的調整を予測することが示された。そして、1時点目の外的調整を統制した上で、1時点目のコントロールが2時点目の外的調整を予測することが示された。その一方で、サンプル2の結果と同様に、1時点目の自律性支援が2時点目の取り入的調整に正の効果を与えることも示された。また、サンプル2と同様に、親が友達付き合いを禁止する程度は子どもの内面化を予測しないことが示された。ここでも禁

止の程度ではなく方法（自律性支援vsコントロール）が重要であることが示された。

Van Petegem et al. (2017)の研究では、子ども評定と母親評定を用いてVansteenkiste et al. (2014)の追試を行った。用いた尺度はVansteenkiste et al. (2014)と同じであったが、内面化の指標としてはRIIを算出して用いた。分析の結果、(2)で説明した道徳ルールに関する結果と同様の結果が得られた。すなわち、子ども評定の場合には自律性支援がRIIに正の効果を与え、コントロールはそれに負の効果を与えていた。母親評定の場合には自律性支援はRIIに正の効果を与えなかったが、コントロールがそれに負の効果を与えていた。なお、母親評定の自律性支援とRIIの間には正の有意な相関が示されていた。また、この研究においても、親が友達との付き合いを禁止する程度（親評定と子ども評定）は子どもの内面化に影響を与えないことが示された。

最後に、Wuyts, Soenens, Vansteenkiste, & Van Petegem (2018)の観察研究では、母子に友人関係をテーマにした会話をさせ、会話中の母親の自律性支援が会話中の子どもの自己開示にどのように影響するかを検討した。具体的には、「会話中の母親の自律性支援→会話中の母子の双方向のやりとり→子どもの自律性及び関係性への欲求の充足→友人関係についての子どもの自律的な自己開示」というプロセスを、観察データを用いて検討した<sup>14</sup>。会話中の母親の自律性支援は、研究者が17の行動指標を用いて評定した。指標の例を挙げると、会話中に何を話すか子どもに選ばせること（選択肢の提供）、子どもの気持ちを認めること、共感的な理解を示すこと、反映技法（子どもの感情、経験、思考を言葉で表すこと）などがある。会話中の母子の相互のやりとりについても研究者が評定を行った。自律的な自己開示については、子どもに「会話中に友人関係について母親に自己開示をした理由」を尋ねることで測定した。具体的には、内的調整（例：このことについて母親と共有したいと思ったから）、同一化的調整（例：母親と話しをすることは自分にとって大切なことだから）、取り入乐的調整（例：そうしないと良くないと思ったから）、外的調整（例：強制されているように感じたから）の4つを測定した。分析にはRAIを用いた。パス解析の結果、「会話中の母親の自律性支援→母子の双方向のやりとり→子どもの自律性及び関係性への欲求の充足→RAI（子どもの自律的な自己開示）」というプロセスが示された。会話中の母親の自律性支援がRAIに及ぼす効果は、日頃の自律性支援（母親評定と子ども評定）と日頃の自己開示（子ども評定）の頻度を統制してもなお有意であった。

6つの研究結果をまとめると、人生上の価値や友人関係に関するルールや行動の内面化は、親（特に母親）からの自律性支援によって促されることが示唆される。方法論についてまとめると、5つの研究において横断計画を用い、1つの研究で縦断計画を用いていた。また、自律性支援の測定について、4つの研究において子ども評定を用い、1つの研究で子ども評定と親評定の両方を用い、1つの研究で研究者評定を用いていた。

#### (4) 関連研究

これまで社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係を検討した実証研究を概観してきたが、ここでは関連するトピックを扱った研究を紹介する。

まず、自律性支援、基本的心理欲求の充足、向社会的行動の関係を検討した研究を紹介する。Gagné (2003)とKindap-Tepe & Aktas (2019)は、横断データを用いてこれら3つの変数の関係を分析した。その結果、親からの全般的な自律性支援(子ども評定)が子どもの欲求充足を促し、その欲求充足が向社会的行動を促すことが見出された。関連する研究として、Nelson, Porta, Bao, Lee, Choi, & Lyubomirsky (2015)の実験的手法を用いた研究がある。この研究からは、自律性支援を受けながら向社会的行動を行うと基本的心理欲求が充足されやすくなり、その結果としてwell-beingが高まりやすくなることを見出されている。

次に、自律性支援と感情制御の関係を検討した研究を紹介する。Rothら(Roth, Assor, Niemiec, Ryan, & Deci, 2009; Roth & Assor, 2012)は、子どもの感情制御に対する親の自律性支援が、望ましい(統合的な)感情制御の発達と関係することを示した。具体的には、親が子どもに怒りや恐れを感情を表出しないように教える時に、怒りや恐れを感じたことに理解を示しながらなぜそれらを出してはいけないかを伝えていると、子どもはそれらの感情を無視したり抑圧したりするのではなく、上手に(統合的に)制御しやすくなることを見出した。Brenning, Soenens, Van Petegem, & Vansteenkiste (2015)は、親の全般的な自律性支援と子どもの統合的な感情制御との関係を縦断調査により検討した。結果から、1時点目の統合的感情制御を統制した後で、1時点目の自律性支援が2時点目の統合的感情制御を予測することが見出された。この分野については最新の論文(Roth, Vansteenskiste, & Ryan, 2019)で理論的な検討と実証研究の概観が行われている。

SDTでは自律性支援のみならず関与(良好な人間関係)も内面化を促すと仮定しているため、この点についても実証的な検討が行われている。例えば、Ryan & Connell (1989)とBarryら(Barry, Padilla-Walker, Madsen, & Nelson, 2008; Barry, Padilla-Walker, & Nelson, 2012)の研究から、親や教師と子どもとの良好な関係が子どもの向社会的行動や道徳的行動の内面化に正の効果を与えることが見出されている。これらの結果と先述したJungert et al. (2016)及びHardy et al. (2008)の結果を踏まえると、自律性支援のみならず関与の側面も社会的行動の内面化を促す重要な役割を果たしているかもしれない。

最後に本邦における実証研究を紹介する。岡田(2008)は、親密な友人関係が形成・維持されるプロセスを動機づけの観点から説明するモデルを提唱した。このモデルでは、「環境要因(親子関係など)や個人要因(愛着スタイルなど)→友人関係における動機づけ→友人に対する行動→親密な友人関係→精神的健康や適応」というプロセスが仮定されている<sup>15</sup>。岡田(例えば、岡田, 2005, 2006; Okada, 2012)はこのプロセスに関する一連の研究を行っている。まず、岡

田(2005)は、友人関係における動機づけを測定する尺度を作成した。本尺度は「友人と親しくしたり一緒に時間を過ごしたりする理由」を尋ねるもので、外的調整(項目例:「一緒にいないと友人が怒るから」)、取り入れ的調整(例:「友人がいないと不安だから」)、同一化的調整(例:「友人関係は自分にとって意味のあるものだから」)、内発的動機づけ(例:「友人と一緒にいるのは楽しいから」)を測定するものである。外的調整と取り入れ的調整は統制的動機づけに該当し、同一化的調整と内発的動機づけは自律的動機づけに該当する。この尺度を用いて行った一連の研究から、友人関係における自律的動機づけは良好な適応状態を予測するが(岡田, 2005, 2006, 2013; Okada, 2012)、とりわけ同一化的調整が友人に対する適応的な行動や親密な友人関係を促進しやすいことが見出されている(岡田, 2013, pp.62-67, pp.76-82)。

山本・河村・上淵(2021a)は、小学生と中学生を対象に「クラスの社会的目標構造の認知→クラスメイトとの関係の動機づけ→クラスメイトに対する向社会的行動」というプロセスを検討した。クラスの社会的目標構造については、学級における向社会的目標(思いやりや互恵性に関する目標)と規範遵守目標(規則や秩序を守ること)の2つを児童生徒がどの程度認知しているかを測定した。向社会的目標の質問項目は「このクラスでは他の人を思いやるのが大事にされています」などであり、規範遵守目標の項目は「このクラスではルールや決まりを守ることができないのは恥ずかしいことだとされています」などである。クラスメイトとの関係の動機づけは、「同じクラスの友人と親しくしたり一緒に時間を過ごしたりする理由」を表し、外的調整(項目例:「友人を作っておくように周りから言われるから」)、取り入れ的調整(例:「友人がいないと不安だから」)、同一化的調整(例:「友人は自分にとって意味のあるものだから」)、内発的動機づけ(例:「友人と一緒にいるのは楽しいから」)の4つを測定した。向社会的行動としては、クラスメイトに対する愛他的行動や援助行動などを測定した(項目例:「仲のよい友達がケガや病気の時保健室に連れて行った」)。多母集団同時分析の結果、小学生・中学生共に「クラスの向社会的目標の認知→内発的動機づけ及び同一化的調整→向社会的行動」というプロセスが示された。そして、小・中学生共に「クラスの規範遵守目標の認知→外的調整→向社会的行動」というプロセスが示された。また、小学生においてのみ「クラスの向社会的目標の認知→外的調整→向社会的行動」というプロセスが示された。この結果について、著者らは、小学生は学級の向社会的目標を完全に内面化できていない(そのためクラスの向社会的目標が他律的な向社会的行動を高めてしまうことになる)可能性があるが、中学生になるまでに指導が積み重なることでそれを十分に内面化できるようになるであろう(その結果として自律的な向社会的行動を行えるようになるであろう)と考察している。また、著者らは別の研究(山本・上淵, 2021b)において、自律性の観点から分類した向社会的動機づけを測定できる尺度を開発している。本尺度は「誰かを手助けしたり相手のためになることをしたりする理由」を尋ねるものであり、同一化的調整(項目例:「相手の役に立ちたいから」)と統制

的調整(外的調整と取り入れ的調整の両者を含んだもの。例:「親や先生に怒られたくないから」「そうしなければ親や先生にほめてもらえないから」)を測定できる尺度である。

#### 4. 先行研究のまとめと課題ならびに今後の方向性

本節では、先行研究のまとめを行い、この分野における課題と今後の方向性を論じる。まとめの対象となるのは、3の(1)(2)(3)で概観した15の研究である。まとめの方法としては、質的な方法と量的な方法の両方を用いる。これらのまとめを踏まえて、課題と今後の方向を示す。

##### (1) 先行研究のまとめ

表2に研究の結果等をまとめた。まず、全体を通して読み取れる傾向を4つ述べる。第1に、自律性支援の内容(独立変数)として、多くの研究が「理由の説明」と「子ども視点」を検討していることがわかる。第2に、方法論に関する特徴として、ほとんどの研究が横断的計画を用いていること、また、自律性支援を子どもに評定させていることがわかる。第3に、それぞれの研究の結果を見ると、一般的に自律性支援が深い内面化(すなわち、同一化的調整、統合的調整、自律的動機づけ、RAI、RII)に正の効果を与えており、SDTの予測が概ね支持される方向にあるとわかる。第4に、これらの結果は、性別や年齢(例えば、Vansteenkiste et al., 2014)、社会的望ましさ(Roth, 2008)、親の温かさ(Roth, 2008)等を統制してもなお示されたものであることがわかる(表2の補足事項参照)。親の温かさは子どもの発達において重要な役割を果たす養育態度の側面であり、この側面を統制してもなお自律性支援に効果があった(自律性支援の増分妥当性が示された)という知見は、理論的に大きな意味をもつ。

次に、上述した第3の傾向を数量的な方法によって確認する。SDTの予測が支持されたかどうかを数量的に確認するために、自律性支援が深い内面化(同一化的調整、統合的調整、自律的動機づけ、RAI、RII)に及ぼす正の効果がどのくらいの割合で得られたかを算出した。より具体的には、検討数に対する正の効果の割合を算出した(計算式は「正の効果の数 / 検討数」である)。検討数とは以下の通りである。先行研究の中には、自律性支援と深い内面化との関係をそれぞれ1つの指標を用いて検討したものと複数の指標を用いて検討したものがある。1つの指標を用いた例として、「子ども評定の自律性支援」と「同一化的調整」を用いて、両者の関係を検討したものがある。他方、複数の指標を用いた例として、「子ども評定の自律性支援」及び「親評定の自律性支援」の2つを用いて、この2つと「RII」との関係を検討したものや(Van Petegem et al., 2017)、「母親の自律性支援」及び「父親の自律性支援」の2つを用いて、この2つと「同一化的調整」及び「統合的調整」の2つとの関係を検討したものがある(Barni et al., 2020)。前者のように、1つの自律性支援の指標と1つの内面化の指標との関係を検討した場合には、検討数を1としてカウントした。後者のように、複数の指標を用いた場合には、指標の数に応じて検討数をカウントした。例えば、「子ども評定の自律性支援」と「親評定の自

律性支援」の2つの指標を用いて「同一化的調整」との関係を検討した研究の場合には、「子ども評定の自律性支援と同一化的調整との関係」と「親評定の自律性支援と同一化的調整との関係」という2つの関係を検討したということで、検討数は2となる。別の例として、「母親の自律性支援」及び「父親の自律性支援」の2つの指標と、「統合的調整」及び「同一化的調整」の2つの指標との関係を検討した研究の場合には、「母親の自律性支援と統合的調整との関係」「母親の自律性支援と同一化的調整との関係」「父親の自律性支援と統合的調整との関係」「父親の自律性支援と同一化的調整との関係」の4つを検討したということで、検討数は4となる。このように1つ1つの研究について「自律性支援」と「深い内面化」との関係を検討した数を算出し、その合計を分母として計算を行った。

結果を表3に示した。得られた結果について個々の研究の内容も加味しながら検討していく。

まず、全ての検討数(25)に対する割合を見ると、正の効果が得られた割合は64%であり、効果無しの割合は32%、交互作用効果の割合は4%、負の効果は0%であった。正の効果は3つの検討の内2つで見出され、効果無しはその内1つで見出された計算になる。ただし、効果無しの結果を解釈する時には、以下の点に注意する必要がある。全ての検討数の中で効果無しであった結果は8つあったが、8つの内少なくとも4つ<sup>16</sup>(全検討数の内16%)で自律性支援と深い内面化との間に正の有意な相関が報告されている。これら4つは、①Van Petegem et al. (2017)の道徳的行動に対する親評定の自律性支援とRIIとの相関、②Van Petegem et al. (2017)の友達付き合いのルールに対する親評定の自律性支援とRIIとの相関、③Barni et al. (2020)の父親の自律性支援と統合的調整との相関、④Barni et al. (2020)の父親の自律性支援と同一化的調整との相関である(それぞれ表2の補足事項を参照のこと)。正の有意な相関がありながら正の効果が示されなかったのは、重回帰分析等において同時に投入した他の独立変数が影響しているからである。具体的には、Van Petegem et al. (2017)の分析では、独立変数として「親評定の自律性支援」と同時に「親評定のコントロール」等を投入して内面化に与える効果を分析していた。分析の結果、自律性支援ではなくコントロールが有意な効果を与えることが示された。また、Barni et al. (2020)の分析では、独立変数として「父親の自律性支援」と同時に「母親の自律性支援」を投入し、内面化に与える効果を分析していた。分析の結果、父親ではなく母親の自律性支援が内面化に効果を与えることが示された。これらの結果は、自律性支援とは反対のかかわりであるコントロールに効果があることや、自律性支援の与え手によって効果が変わることを示すものであり、「自律性支援の効果は無い」ということを積極的に示すものではない。表3の数値を評価する際には、こういった点に注意する必要がある。

次に、データの収集法別に結果を検討する。縦断データに関する2つの検討(Vansteenkisite et al., 2014のSample 1とSample 2)は方法論上重要な意味をもつが、そのどちらの検討でも正の効果が示された。この結果は、時間的に先行する自律性支援が内面化の変化を予測したこ

表2 社会的行動に対する自律性支援とその内面化との関係を検討した実証研究のまとめ

研究者	研究対象になった社会的行動・価値	独立変数 (自律性支援の内容)	従属変数 (内面化の指標)	結果 (効果の方向)	方法論	補足事項
Roth (2008)	向社会的行動	母親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 父親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	同一化的・統合的調整 取り入れ調整 同一化的・統合的調整 取り入れ調整	正 無 正 無	横断 子ども評定	・構造方程式モデリングにより「自律性支援・条件つき承認→調整スタイル→向社会的行動」というプロセスを母親・父親に分けて分析 ・分析では親の温かき(warmth)と社会的望ましさを統制した ・単純相関では母親からの自律性支援と取り入れ調整との間に負の有意な相関有り ・取り入れ調整に対しては自律性支援ではなく条件つき承認が影響した(母親とも)
Roth, Kanat-Maymon, & Bibi (2010)	向社会的行動	教師の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	同一化的調整 外的調整	正 無	横断 子ども評定	・マルチレベル分析により「自律性支援→調整スタイル→いじめ行為」というプロセスを分析 ・分析では子どもの性別を統制 ・個人(生徒)レベルでも集団(クラス)レベルでも効果が示された ・単純相関では自律性支援と外的調整との間に負の有意な相関有り
Roth & Weinstock (2013)	向社会的行動	教師の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	同一化的調整	正	横断 子ども評定	・「教師の認識論的信念→自律性支援→調整スタイル」というプロセスをマルチレベル分析(階層線型モデル)で分析した。認識論的信念は教師自身によって評定された(そのため、クラスレベルの分析が行われた)
Jungert, Proddi, & Thornberg (2016)	向社会的行動	教師の自律性支援 子どもの選択や興味 の尊重	同一化的・内的調整 外的調整	無 無	横断 子ども評定	・構造方程式モデリングにより「自律性支援・温かき・対立→調整スタイル→いじめ被害者に対する援助行動」というプロセスを性別に分析 ・女子において「温かき→同一化・内的調整→援助行動」「対立→外的調整→積極・観察的行動」というプロセスが示された
Hardy, Padilla-Walker, & Carlo (2008)	道徳的行動	母親ないし父親の自律性支援	統合的調整 同一化的調整 取り入れ調整 外的調整	無 無 無 無	横断 子ども評定	・「自律性支援(自律性許容)・関与(応答性)・構造(要求性)を同時に投入した後、それらの交互作用を投入する階層的重回帰分析を行った ・関与(応答性)が高い時に自律性支援(自律性許容)が統合的調整を促進することが示された ・関与は単独で統合的調整及び同一化調整に正の効果を与えていた ・分析では親の性別と子どもの性別・年齢が統制された
Bureau & Mageau (2014)	道徳的行動	母親ないし父親の自律性支援 ①理由の説明 ②選択肢の提供 ③気持ちを認めること	RAIと性格特性の 潜在変数	正	横断 子ども評定	・「自律性支援及びコントロール(同時に検討)→内面化(RAI)と性格特性の潜在変数を構造方程式モデリングにより検討 ・RAIは自律性支援と正の有意な相関、コントロールと負の有意な相関を示した ・年齢を統制した上で検討 ・多母集団同時分析を行ったところ、男女で結果に違いがないことが確認された
Vansteenkiste, Soenens, Van Petegem, & Duriez (2014), Sample 2	道徳的行動	母親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	同一化的調整 取り入れ調整 外的調整	正 正 無	縦断 子ども評定	・1時点目の調整スタイルを統制して「1時点目の自律性支援→2時点目の調整スタイルを」をバク解析により分析 ・1時点目のコントロールも同時に分析された ・子どもの性別・年齢等を統制した ・単純相関では、1時点目の自律性支援と1時点目及び2時点目の外的調整との間、ならびに、2時点目の自律性支援と外的調整との間に負の有意な相関有り
Van Petegem, Vansteenkiste, Soenens, Zimmermann, Antonietti, Baudat, & Audeaert (2017)	道徳的行動	母親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	R II	無 (親評定) 正 (子ども評定)	横断 親評定と 子ども評定	・「自律性支援及びコントロール(同時に検討)→内面化」を分析 ・単純相関では母親評定の自律性支援と子どもの内面化に正の相関が示された ・母親評定では自律性支援ではなくコントロールが子どもの内面化に効果を与えていたため、コントロールの影響が大きい可能性がある ・子どもの性別と年齢を統制して分析
Barni, Russo, Zagrean, Di Fabio, & Danioni (2020)	道徳的行動	母親の自律性支援 意志機能の促進 父親の自律性支援 意志機能の促進	統合的調整 同一化的調整 取り入れ調整 外的調整 統合的調整 同一化的調整 取り入れ調整 外的調整	正 正 無 無 無 無 無 無	横断 子ども評定	・単純相関では父親の自律性支援と子どもの統合的調整、同一化的調整、取り入れ調整との間に正の有意な相関有り ・重回帰分析において母親と父親の支援を同時に投入しているため、内面化において母親からの支援が相対的に重要であると示唆される ・子どもの性別と年齢を統制して分析
Soenens & Vansteenkiste (2005)	友人関係	母親の自律性支援 父親の自律性支援 教師の自律性支援	RAI RAI RAI	正 正 無	横断 子ども評定	・「母親・父親・教師の自律性支援→RAI→社会的コンピテンス」というプロセスを構造方程式モデリングにより分析 ・子どもの性別・年齢等を統制した ・父親・教師の自律性支援は単純相関でもRAIと有意な相関が示されなかった ・自律性支援の尺度が適切でなかった可能性が考えられる(特に教師の自律性支援:本文へ)
Kanfo & Assor (2007), (2007)の研究1 (大学生)	人生上の価値	両親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 ③選択肢の提供	自律的動機づけ 統制的動機づけ	正 負	横断 子ども評定	・自律的動機づけは同一化的調整と統合的調整の合計点を、統制的動機づけは取り入れ調整と外的調整の合計点を表す ・分析においては性別等が統制された
Kanfo & Assor (2007), (2007)の研究2 (高校生)	人生上の価値	両親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点 ③選択肢の提供	自律的動機づけ 統制的動機づけ	正 無	横断 子ども評定	・自律的動機づけは同一化的調整と統合的調整の合計点を、統制的動機づけは取り入れ調整と外的調整の合計点を表す ・尺度得点の性差なし
Soenens, Vansteenkiste, & Niemiec (2009)	友達付き合いのルール	両親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	RAI	正	横断 子ども評定	・「自律性支援→コントロール→内面化→非行少年とのかかわり問題行動」というプロセスを構造方程式モデリングにより分析 ・分析においては性別が統制された
Vansteenkiste, Soenens, Van Petegem, & Duriez (2014), Sample 1	友達付き合いのルール	母親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	同一化的調整 取り入れ調整 外的調整	正 正 無	縦断 子ども評定	・1時点目の調整スタイルを統制して「1時点目の自律性支援→2時点目の調整スタイルを」をバク解析により分析 ・1時点目のコントロールも同時に投入された ・子どもの性別・年齢等を統制した ・単純相関では同じ時点での自律性支援と外的調整との間に負の有意な相関有り
Van Petegem, Vansteenkiste, Soenens, Zimmermann, Antonietti, Baudat, & Audeaert (2017)	友達付き合いのルール	母親の自律性支援 ①理由の説明 ②子ども視点	R II	無 (親評定) 正 (子ども評定)	横断 親評定と 子ども評定	・自律性支援とコントロールを同時に投入して内面化への効果を分析 ・単純相関では母親評定の自律性支援と子どもの内面化に正の有意な相関が示された ・母親評定では自律性支援ではなくコントロールが子どもの内面化に効果を与えていたため、コントロールの影響が大きい可能性がある ・子どもの性別と年齢を統制して分析
Wuyts, Soenens, Vansteenkiste, & Van Petegem (2018)	友人関係についての自己開示	母親の自律性支援 選択肢の提供 気持ちを認めること 共感的理解 反映技法、他	RAI	正	横断 研究者評定	・会話中の親子のやりとりから研究者が自律性支援を評定した ・会話の前の自覚の母親の自律性支援と自覚の子どもの自己開示の頻度を統制してもなお、会話中の自律性支援が自己開示の自律的理由に正の効果を与えた ・検討した変数と性別・年齢・教育的バックグラウンドなどとの間に有意な相関は示されなかった

注) 正=正の効果、無=効果なし、負=負の効果。RAI=Relative Autonomy Index, RII=Relative Internalization Index.

表3 自律性支援が深い内面化(同一化的調整、統合的調整、自律的動機づけ、RAI、RII)に及ぼす効果のまとめ

		検討数	正の効果	交互作用	効果無し	負の効果	正の効果の数/検討数	効果無しの数/検討数
全体		25	16	1	8	0	0.64	0.32
データ収集法別	横断データ	23	14	1	8	0	0.61	0.35
	縦断データ	2	2	0	0	0	1.00	0.00
評定者別	子ども評定	22	15	1	6	0	0.68	0.27
	親・研究者評定	3	1	0	2	0	0.33	0.67
支援者別	教師	4	2	0	2	0	0.50	0.50
	保護者	21	14	1	6	0	0.67	0.29
	両親	3	3	0	0	0	1.00	0.00
	母親	11	9	0	2	0	0.82	0.18
	父親	4	1	0	3	0	0.25	0.75
	母親ないし父親	3	1	1	1	0	0.33	0.33

注) 便宜的に効果という言葉を用いているが、因果関係を示しているわけではない。

とを示すものであり、自律性支援と内面化の因果関係について重要な示唆を与えるものである。ただし、これら2つの検討では、自律性支援が取り入れの調整にも正の効果を与えていた。これは理論的な予測とは異なる結果であり、考慮しなければならない結果である。

評定者別に結果を見てみると、自律性支援を親自身が評定した時(検討数2)には予測通りの結果が得られていない。他方、研究者が評定した時には(検討数1)予測通りの結果が示されている。ただし、親評定と研究者評定を用いた検討は合わせて3つと少ないのが現状である。Soenens et al. (2015)は、子どもの内面化に実質的に影響するのは「親の実際の行動」ではなく「子どもによる親の行動の知覚や評価(appraisal)」であると主張しており、この主張に沿った結果となっているが、親の実際の行動の影響力について結論を出すためには今後の研究知見の蓄積が必要であろう。

最後に、支援者別に結果を検討する。教師と保護者を比較すると、保護者の方が予測通りの結果となっている。次に、保護者の内、母親と父親を比較すると、母親の方が予測通りの結果となっている。この結果から、子どもの社会的行動の内面化においては父親よりも母親の方が相対的に重要な役割を果たしていることが示唆される。ただし、教師の検討数と父親の検討数はそれぞれ4と少ないため、さらなる知見の蓄積が必要であろう。

## (2) この分野における研究の課題と今後の方向性

### ①方法論上の課題

第1に、研究計画に関する課題を挙げる事ができる。ほとんどの研究が横断的な研究計画によって行われたものであり、一時点の調査データを用いて変数間の相関関係を示したものである。これらの研究から因果関係に関する確固とした結論を引き出すことは難しい。質問紙調査の場合には、Vansteenkiste et al (2014)の研究のように、縦断計画によりデータを収集し、一時点目の内面化を統制した上で一時点目の自律性支援が二時点目の内面化を予測するかどうか



かを検討すること（時間的に先行する自律性支援が内面化の得点変化を予測するかどうかを検討すること）が必要である。また、実験計画や介入研究によって自律性支援を操作した上で、子どもの内面化に変化が生じたかどうかを検討することが必要である。

第2に、自律性支援の測定に関する課題を挙げることができる。先述した通り、ほとんどの研究において親や教師の自律性支援を子どもに評定させていた。子どもの内面化に実質的に影響するのは「実際の親の行動」ではなく「子どもによる親の行動の知覚や評価」であるというSoenens et al. (2015)の主張を踏まえると、子ども評定を用いることには大きな意義がある。その一方で、自己報告式の尺度を用いて全ての変数を測定した場合には、shared method varianceの問題が生じ、本来見られないはずの関係が見出されてしまう可能性もある。この可能性を排除するためには、親、教師、あるいは研究者の評定も同時に用いることが望ましいと考えられる (Soenens & Vansteenkiste, 2005; Van Petegem et al., 2018)。

## ②自律性支援が内面化に影響するメカニズム—媒介要因と調整要因の検討—

自律性支援が内面化に影響するメカニズムにおいて、自律性支援の影響を媒介したり調整したりする変数が存在すると考えられる。この媒介変数や調整変数を特定することも今後の課題として挙げられる。

媒介要因について、SDTでは、基本的心理欲求の充足（それにより自律性・関係性・有能さの感覚が高まること）を仮定している。しかしながら、この媒介要因を実証的に検討した研究はWuyts et al. (2018)以外に見あたらない。今後知見の蓄積が必要である。

調整要因について、RyanやDeciはその存在を明確に論じていない。他方、Soenens et al. (2015)は、自律性支援の効果には個人差があると主張している。本レビューの結果からも、全検討数のおよそ三分之一で自律性支援が深い内面化に効果を与えないことが示された。この結果は自律性支援の効果を調整する要因が存在する可能性を示唆している。

Soenens et al. (2015)は、親の自律支援的な行動や統制的な行動を子どもがどのように知覚・評価するかは、子どものパーソナリティ特性や文化によって異なると主張した（第1節参照）<sup>17</sup>。文化に関しては、西欧における個人主義的な (individualistic) 文化と日本や韓国などの集団主義的な (collectivistic) 文化の違いが指摘されている。わが国の研究からは、教師や親の自律性支援（子ども評定）が子どもの学習活動の内面化やポジティブな学習態度に正の効果を与えることが見出されている（速水, 1997, 2019；伊藤, 2016; 鹿毛他, 1997; 三和・外山, 2021; 岡田, 2014）。その一方で、韓国の研究からは、パーソナリティ特性の1つである社会規定的完全主義の高い者において自律性支援（子ども評定）がストレスを高めるという結果が見出されている (Seong, Lee, & Lee, 2022)。Seongらは、「完璧であることを他者から求められている」「他者から過度に期待されている」と思っている韓国人は、親の自律支援的な行動をプレッシャーとして感じてしまい、その結果ストレスをためやすくなるのではないかと考察している。社会

的行動に対する自律性支援がその内面化に与える効果については我が国においても東アジア諸国においても検討されていないため、その効果に文化やパーソナリティによる違いが見られるかどうか現時点では定かではない。今後研究を積み重ねていく必要がある。

文化やパーソナリティ特性に加えて、自律性支援以外の支援方法（例えば、関与や構造）も自律性支援の効果を調整している可能性がある。3の(2)で説明したHardy et al. (2008)の研究から、自律性支援が内面化に与える正の効果は関与が高い場合においてのみ示され、それが低い場合には示されないことが見出された。この知見は、自律性支援が望ましい効果を発揮するためには、支援の与え手（親や教師）と受け手（子ども）との間に良好な関係が築かれている必要があることを示唆している。

自律性支援の効果を調整する要因は複数考えられ、上記以外の要因もあるだろう。このテーマに関する実証研究は少なく、自律性支援がいつどのような人に対して最も効果を発揮するかについて今後の研究が必要であろう。

### ③自律性支援は調整タイプの質的な変化を予測するか？

先行研究では自律性支援とそれぞれの調整タイプとの関係が検討されてきたが、自律性支援が調整タイプの「質的な変化」を予測するかどうかについては検討されていない。より具体的には、「外的調整」や「取り入れ的調整」であった子どもが、自律性支援を受けることによって、「同一化的調整」や「統合的調整」へと質的に変わっていくかどうかという点について検討されていない。統制的な調整タイプから自律的な調整タイプへの質的な変化が自律性支援によって予測されるかどうかについて今後検討が必要であろう。

### ④親（自律性支援）と子ども（内面化）の双方向の影響

養育態度の理論・研究では、親の養育態度が子どもの行動を規定すると同時に子どもの行動が親の養育態度を規定するという相互作用モデルが採用されており、自律性支援の研究においてもこの考え方が採用されている（Soenens et al., 2015; Vansteenkiste et al., 2014）。Vansteenkiste et al. (2014)の縦断研究では、「自律性支援・コントロール（親）→内面化・反抗（子ども）」という関係だけでなく、「内面化・反抗（子ども）→自律性支援・コントロール（親）」という関係も検討していた（図2参照）。その結果から、同一化的調整が自律性支援に正の効果を与え、外的調整や反抗がそれに負の効果を与えることが示されている。

親と子どもの双方向の影響を検討するためには、Vansteenkiste et al. (2014)のように縦断的計画を用いた研究が必要である。しかしながら、現時点では縦断研究が少なく、双方向の影響プロセスを理解するための知見が十分ではない。このテーマに関しても研究の蓄積が待たれる。

### ⑤自律性支援及びコントロールの規定要因

なぜある大人は自律支援的な行動をとりやすく、別の大人はコントロールする行動をとりやすいかという疑問に答えるのが、自律性支援およびコントロールの規定要因に関する研

究である。学業活動に対する自律性支援の規定要因については数多く検討されているものの（レビューとして、Haerens, Vansteenkiste, Alterman, & Van den Berghe, 2016; Pelletier & Rocchi, 2016; 最近の実証研究として、Liu, Wang, Reeve, Kee, & Chian, 2020; 三和・外山, 2021; Reeve, Jang, & Jang, 2018）、社会的行動に対する自律性支援の規定要因についてはほとんど検討されておらず、筆者の知る限り、Roth & Weinstock (2013)の研究のみである（3の(1)参照）。社会的行動に対する自律性支援のダイナミクスを明らかにするために、規定要因に関する検討も今後必要であろう。

## 脚注

- 1 SDT では、内面化は人間が本来的にもっている心的傾向であると考え（Ryan & Deci, 2017）。また、自律性支援は基本的心理欲求の充足を通して内面化を促進する、外側からの重要な働きかけであると考え（Ryan & Deci, 2017）。
- 2 調整（制御：regulation）とは、「自分の行動をどのように制御しているか（あるいは、自分の行動がどのように制御されているか）」を表す概念である。また、ここで説明している外発的動機づけの分類は、正確にはSDTを構成するミニ理論の1つである有機的統合理論の中で行われている。文脈を考慮してここではSDTと表記する。
- 3 Soenens et al. (2015) はコントロールの効果に関しても同様の考え方を提起している。
- 4 autonom\* support\*としたのは、autonomous support や autonomy supportive を用いた論文も検索できるようにするためである。
- 5 prosocialia\*、moral\*、friend\*としたのは、prosociality、prosocialable、morality、friendship を用いた論文も検索できるようにするためである。
- 6 SRQ は、「人が行動の価値をどの程度深く内面化できているかは、その行動を行う理由を尋ねることによって測定できる」という考えに基づいて開発された尺度である。
- 7 Hardy et al. (2008) では、応答性と自律許容の交互作用が同一化的調整を予測したとも報告しているが、応答性と自律許容の交互作用項を投入した時の $R^2$ 増加量は有意ではない。従って本論文ではこの結果を報告しないことにした。
- 8 より正確に説明すると、ステップ1で母親及び父親のかかわりと子どもの性別・年齢を投入し、ステップ2で母親及び父親のかかわりと子どもの性別との交互作用項を投入し、ステップ3で母親及び父親のかかわりと子どもの年齢との交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った。母親・父親のかかわりと子どもの性別・年齢との交互作用はいずれも有意にならなかった。
- 9 この研究では、親に対する反抗と親の権威の正統性に関する子どもの知覚も測定し、自律性支援及びコントロールとの関係を検討しているが、煩雑になるためそれらの結果は省略する。
- 10 Relative Autonomy Index と同様の計算式で算出された指標である。
- 11 自律性支援及びコントロールと領域（道徳領域と友達付き合い領域）との交互作用がRIIに及ぼす効果を検討したところ、有意でなかった。従って、自律性支援及びコントロールのRIIに及ぼす効果は2つの領域において同等であるといえる。
- 12 より正確に説明すると、この研究では「親からの自律性支援及びコントロールの知覚（子ども評定）と正直さに関する親の価値づけ（親評定）→子どもの正直であることの価値の認識、正直に話すことのベネフィットとコスト、嘘をつくことのコスト→正直である傾向」というプロセスが検討された。
- 13 この研究では、価値を「何が良くて何が良くないかを判断する時に用いる人生上の目標や基準」と定

義している。

- 14 これらの変数の他に、母親の欲求充足、会話に関する子ども及び母親の満足、会話中の子どもの自己開示の程度も検討されたが、これらの結果については省略する。また、母子の双方向のやりとりは、研究者が行動観察によって評定した。自律性及び関係性への欲求の充足は、会話後に子どもに評定させた。
- 15 さらに、親密な友人関係が友人関係における動機づけに影響すること（すなわち、友人関係における動機づけと親密な友人関係の循環的な関係）が仮定されている。
- 16 「少なくとも4つ」と記したのは、残りの4つの検討の内1つでは相関係数が報告されていないためである。
- 17 Soenens et al. (2015) は、「①親の行動→②親の行動に対する子どもの appraisal（知覚と意味づけ）→③発達の結果」というプロセスを仮定し、①と②の間に調整要因（文化やパーソナリティ）が関与するというモデルを提起した。このモデルにおいては、親の統制的行動がもたらす結果についても仮定されており、「①親の潜在的な統制的行動→②親から統制されているという子どもの appraisal →③親の統制への対処（coping；調整、交渉、服従、対抗）」というプロセスが仮定されている。このプロセスは、ラザルスとフォークマンのストレスモデルの考え方を想起させる。

## 引用文献

- Arvanitis, A. (2017). Autonomy and morality: A Self-Determination Theory discussion of ethics. *New Ideas in Psychology*, 47, 57-61.
- Assor, A. (2012). Autonomous moral motivation: Consequences, socializing antecedents, and the unique role of integrated moral principles. In M. Mikulincer & P. R. Shaver (Eds.), *The social psychology of morality: Exploring the causes of good and evil* (pp. 239-255). American Psychological Association.
- Barni, D., Russo, C., Zagrean, I., Di Fabio, M., & Danioni, F. (2020). Adolescents' internalization of moral values: The role of paternal and maternal promotion of volitional functioning. *Journal of Family Studies*, 26, 1-13.
- Barry, C. M., Padilla-Walker, L. M., Madsen, S. D., & Nelson, L. J. (2008). The impact of maternal relationship quality on emerging adults' prosocial tendencies: Indirect effects via regulation of prosocial values. *Journal of Youth and Adolescence*, 37(5), 581-591.
- Barry, C. M., Padilla-Walker, L. M., & Nelson, L. J. (2012). The role of mothers and media on emerging adults' religious faith and practices by way of internalization of prosocial values. *Journal of Adult Development*, 19(2), 66-78.
- Brenning, K., Soenens, B., Van Petegem, S., & Vansteenkiste, M. (2015). Perceived maternal autonomy support and early adolescent emotion regulation: A longitudinal study. *Social Development*, 24(3), 561-578.
- Bureau, J. S., & Mageau, G. A. (2014). Parental autonomy support and honesty: The mediating role of identification with the honesty value and perceived costs and benefits of honesty. *Journal of Adolescence*, 37(3), 225-236.
- Connell, J. P., & Wellborn, J. G. (1991). Competence, autonomy, and relatedness: A motivational analysis of self-system processes. In M. R. Gunnar & L. A. Sroufe (Eds.), *Self processes and development* (pp. 43-77). Lawrence Erlbaum Associates.
- Deci, E. L., Eghrari, H., Patrick, B. C., & Leone, D. R. (1994). Facilitating internalization: The self-determination theory perspective. *Journal of Personality*, 62, 119-142.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Springer.

- Donald, J. N., Bradshaw, E. L., Conigrave, J. H., Parker, P. D., Byatt, L. L., Noetel, M., & Ryan, R. M. (2021). Paths to the light and dark sides of human nature: A meta-analytic review of the prosocial benefits of autonomy and the antisocial costs of control. *Psychological Bulletin*, *147*(9), 921-946.
- Gagné, M. (2003). The role of autonomy support and autonomy orientation in prosocial behavior engagement. *Motivation and Emotion*, *27*(3), 199-223.
- Grolnick, W. S., Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1997). Internalization within the family: The self-determination theory perspective. In J. E. Grusec & L. Kuczynski (Eds.), *Parenting and children's internalization of values: A handbook of contemporary theory* (pp. 135-161). Wiley.
- Haerens, L., Vansteenkiste, M., Aelterman, N., & Berghe, L. V. D. (2016). Toward a systematic study of the dark side of student motivation: Antecedents and consequences of teachers' controlling behaviors. In W. C. Liu, J. C. K. Wang, & R. M. Ryan (Eds.), *Building autonomous learners: Perspectives from research and practice using self-determination theory*. (pp. 59-81). Springer.
- Hardy, S. A., Padilla-Walker, L. M., & Carlo, G. (2008). Parenting dimensions and adolescents' internalisation of moral values. *Journal of Moral Education*, *37*(2), 205-223.
- 速水敏彦 (1997). 動機づけの内面化過程の促進に関する研究 平成7・8年度科学研究費補助金基盤研究(C) (2) 研究成果報告書
- 速水敏彦 (2019). 内発的動機づけと自律的動機づけ—教育心理学の神話を問い直す— 金子書房
- 伊藤崇達 (2016). 親の自律的動機づけ, 動機づけ支援と子の自律的動機づけ, 自己調整学習方略の使用との関連—自律性支援と自己抑制支援に着目した因果モデルの検証— 日本教育工学会論文誌, *39*, 81-84.
- Jungert, T., Piroddi, B., & Thornberg, R. (2016). Early adolescents' motivations to defend victims in school bullying and their perceptions of student-teacher relationships: A self-determination theory approach. *Journal of Adolescence*, *53*, 75-90.
- 鹿毛雅治・上淵寿・大家まゆみ (1997). 教育方法に関する教師の自律性支援の志向性が授業過程と児童の態度に及ぼす影響 教育心理学研究, *45*(2), 192-202.
- Kindap-Tepe, Y., & Aktas, V. (2021). The mediating role of needs satisfaction for prosocial behavior and autonomy support. *Current Psychology*, *40*(10), 5212-5224.
- Knafo, A., & Assor, A. (2007). Motivation for agreement with parental values: Desirable when autonomous, problematic when controlled. *Motivation and Emotion*, *31*(3), 232-245.
- Krapp, A. (2013). Moral motivation from the perspective of the self-determination theory and the person-object theory of interest. In K. Heinrichs, F. Oser, & T. Lovat (Eds.), *Handbook of moral motivation: Theories, models, applications* (pp. 113-140). Springer.
- Krettenauer, T., & Curren, R. (2020). Self-determination theory, morality, and education: Introduction to special issue. *Journal of Moral Education*, *49*(3), 275-281.
- 黒田祐二 (2022). 社会的場面における児童生徒の他律から自律への変化とその支援方法—自己決定理論による説明とその生徒指導への示唆— 福井県立大学論集, *57*(2), 63-86.
- Liu, W. C., Wang, C. J., Reeve, J., Kee, Y. H., & Chian, L. K. (2020). What determines teachers' use of motivational strategies in the classrooms? A self-determination theory perspective. *Journal of Education*, *200*(3), 185-195.
- 三和秀平・外山美樹 (2021). 教師の教科指導学習動機は小学生の自律的な学習動機づけと関連するのか—自律性支援を媒介要因として— 教育心理学研究, *69*(1), 26-36.
- Nelson, S. K., Della Porta, M. D., Jacobs Bao, K., Lee, H. C., Choi, I., & Lyubomirsky, S. (2015). 'It's up to you': Experimentally manipulated autonomy support for prosocial behavior improves well-being in two cultures over six weeks. *The Journal of Positive Psychology*, *10*(5), 463-476.

- Núñez, J. L., & León, J. (2015). Autonomy support in the classroom. *European Psychologist*, *20*(4), 275-283.
- 岡田涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから— パーソナリティ研究, *14*(1), 101-112.
- 岡田涼 (2006). 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響— パーソナリティ研究, *15*(1), 52-54.
- 岡田涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築. 教育心理学研究, *56*(4), 575-588.
- Okada, R. (2012). Friendship motivation, aggression, and self-esteem in Japanese undergraduate students. *Psychology*, *3*(1), 7-11.
- 岡田涼 (2013). 友だちとのかかわりを促すモチベーション—自律的動機づけからみた友人関係— 北大路書房
- 岡田涼 (2014). 中学生における教師の自律性支援の認知が教科の学習内容に対する興味に及ぼす影響—学業的効力感と社会的効力感を介するプロセス— 香川大学教育実践総合研究, *28*, 15-22.
- 岡田涼 (2018). 教師の自律性支援の効果に関するメタ分析— 香川大学教育学部研究報告, *150*, 31-50.
- Pelletier, L. G., & Rocchi, M. (2016). Teachers' motivation in the classroom. In W. C. Liu, J. C. K. Wang, & R. M. Ryan (Eds.), *Building autonomous learners: Perspectives from research and practice using self-determination theory*. (pp.107-127). Springer.
- Reeve, J., & Cheon, S. H. (2021). Autonomy-supportive teaching: Its malleability, benefits, and potential to improve educational practice. *Educational Psychologist*, *56*(1), 54-77.
- Reeve, J., Jang, H. R., & Jang, H. (2018). Personality-based antecedents of teachers' autonomy-supportive and controlling motivating styles. *Learning and Individual Differences*, *62*, 12-22.
- Roth, G. (2008). Perceived parental conditional regard and autonomy support as predictors of young adults' self- versus other-oriented prosocial tendencies. *Journal of Personality*, *76*(3), 513-534.
- Roth, G., & Assor, A. (2012). The costs of parental pressure to express emotions: Conditional regard and autonomy support as predictors of emotion regulation and intimacy. *Journal of Adolescence*, *35*(4), 799-808.
- Roth, G., Assor, A., Niemiec, C. P., Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2009). The emotional and academic consequences of parental conditional regard: Comparing conditional positive regard, conditional negative regard, and autonomy support as parenting practices. *Developmental Psychology*, *45*(4), 1119-1142.
- Roth, G., Kanat-Maymon, Y., & Bibi, U. (2011). Prevention of school bullying: The important role of autonomy-supportive teaching and internalization of pro-social values. *British Journal of Educational Psychology*, *81*(4), 654-666.
- Roth, G., Vansteenkiste, M., & Ryan, R. M. (2019). Integrative emotion regulation: Process and development from a self-determination theory perspective. *Development and Psychopathology*, *31*(3), 945-956.
- Roth, G., & Weinstock, M. (2013). Teachers' epistemological beliefs as an antecedent of autonomy-supportive teaching. *Motivation and Emotion*, *37*(3), 402-412.
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. *Journal of Personality and Social Psychology*, *57*(5), 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2013). Toward a social psychology of assimilation: Self-determination theory in cognitive development and education. In B. W. Sokol, F. M. E. Grouzet, & U. Müller (Eds.), *Self-regulation and autonomy: Social and developmental dimensions of human conduct*. (pp.191-207). Cambridge University Press.

- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2020). Intrinsic and extrinsic motivation from a self-determination theory perspective: Definitions, theory, practices, and future directions. *Contemporary Educational Psychology*, 61, Article 101860.
- 佐柳信男 (2007). 小学生の勉強における認知された因果性の所在を測定する質問紙尺度の作成 ソーシャル・モチベーション研究, 4, 63-82.
- Seong, H., Lee, S., & Lee, S. M. (2022). Is autonomy-supportive parenting universally beneficial? Combined effect of socially prescribed perfectionism and parental autonomy support on stress in emerging adults in South Korea. *Current Psychology*, <https://doi.org/10.1007/s12144-021-02520-x>.
- Skinner, E. A., & Belmont, M. J. (1993). Motivation in the classroom: Reciprocal effects of teacher behavior and student engagement across the school year. *Journal of Educational Psychology*, 85, 571-581.
- Slemp, G. R., Kern, M. L., Patrick, K. J., & Ryan, R. M. (2018). Leader autonomy support in the workplace: A meta-analytic review. *Motivation and Emotion*, 42(5), 706-724.
- Soenens, B., & Vansteenkiste, M. (2005). Antecedents and outcomes of self-determination in 3 life domains: The role of parents' and teachers' autonomy support. *Journal of Youth and Adolescence*, 34(6), 589-604.
- Soenens, B., Vansteenkiste, M., & Niemiec, C. P. (2009). Should parental prohibition of adolescents' peer relationships be prohibited? *Personal Relationships*, 16(4), 507-530.
- Soenens, B., Vansteenkiste, M., & Van Petegem, S. (2015). Let us not throw out the baby with the bathwater: Applying the principle of universalism without uniformity to autonomy-supportive and controlling parenting. *Child Development Perspectives*, 9(1), 44-49.
- Stroet, K., Opdenakker, M. C., & Minnaert, A. (2013). Effects of need supportive teaching on early adolescents' motivation and engagement: A review of the literature. *Educational Research Review*, 9, 65-87.
- Su, Y. L., & Reeve, J. (2011). A meta-analysis of the effectiveness of intervention programs designed to support autonomy. *Educational Psychology Review*, 23(1), 159-188.
- Van Petegem, S., Vansteenkiste, M., Soenens, B., Zimmermann, G., Antonietti, J. P., Baudat, S., & Audenaert, E. (2017). When do adolescents accept or defy to maternal prohibitions? The role of social domain and communication style. *Journal of Youth and Adolescence*, 46(5), 1022-1037.
- Vansteenkiste, M., Soenens, B., Van Petegem, S., & Duriez, B. (2014). Longitudinal associations between adolescent perceived degree and style of parental prohibition and internalization and defiance. *Developmental Psychology*, 50(1), 229-236.
- Vasquez, A. C., Patall, E. A., Fong, C. J., Corrigan, A. S., & Pine, L. (2016). Parent autonomy support, academic achievement, and psychosocial functioning: A meta-analysis of research. *Educational Psychology Review*, 28(3), 605-644.
- Wuyts, D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., & Van Petegem, S. (2018). The role of observed autonomy support, reciprocity, and need satisfaction in adolescent disclosure about friends. *Journal of Adolescence*, 65, 141-154.
- 山本琢俊・河村茂雄・上淵寿 (2021a). 学級の社会的目標構造とクラスメイトへの自律的な向社会的行動との関連—小中学生の差異に着目して— 教育心理学研究, 69(1), 52-63.
- 山本琢俊・上淵寿 (2021b). 中学生用向社会的動機づけ尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 パーソナリティ研究, 30(1), 12-22.